

これは隣に越してきた双子と僕のおなはし・・・

お隣さんと僕。



お隣さんと僕。

お隣さんと僕。



お隣さんと僕。

二人は僕の全てを破壊して僕の全てになった。
僕は二人のおもちゃ・・・犬・・・赤ちゃん・・・パパ・・・。
僕はただ体液を吐き出すだけの肉になる。



お隣さんと僕。

僕には優しい妻がいる。
大学のころから付き合っていて、
六年目でようやく結婚した。
いやだった会社勤めにも慣れ、
それなりに仕事にたのしみも見いだせてきた。
広い部屋ではないが、
マンションで二人暮らしをしている。
休日に二人でマイホームの夢なんかを話すのが、
今の僕の一番の幸せだ……。





5n7u0n2#550

5n7u0n2#550

「いってらっしゃい」
「ちょっとちょっと、カバンは？(笑)」
「あ、ごめんなさい(笑)」
妻はちょっと天然がはいってて、
それもまたかわいい。
大好きな女性に見送られて出勤する。
帰ってきたらご飯の準備をして
笑顔で迎えてくれる。
なんという幸せ。そして、今はいけないけど、
二人の子どももきつといつかできるだろう。。。
そんなある休日のことだった。



ピンポーン、とインターホンがなり、
出てみると、女の子が二人立っていた…。
「こんにちは〜♡」「こんにちは…。」
二人はまずあいさつをした。
僕の耳には、二人の元気な声と
か細い声が聞こえていたはずだった。
しかし、僕はまず二人の豊満…
という言葉では収まらないような
圧倒的な胸に目をうばわれた。



「あ……しんにちは」
「我に返り、急いで胸から視線を上げて、
あいさつを返した。
そしてだいたい遅れてからその二人の身長が
とても低いことに気づいた。
「ママにおとなりにあいさつ
してきなさいっていわれて〜♡」
と左の子が言った。
「またまたさつちに行ってしまう。」
「あ、あいさつ?」

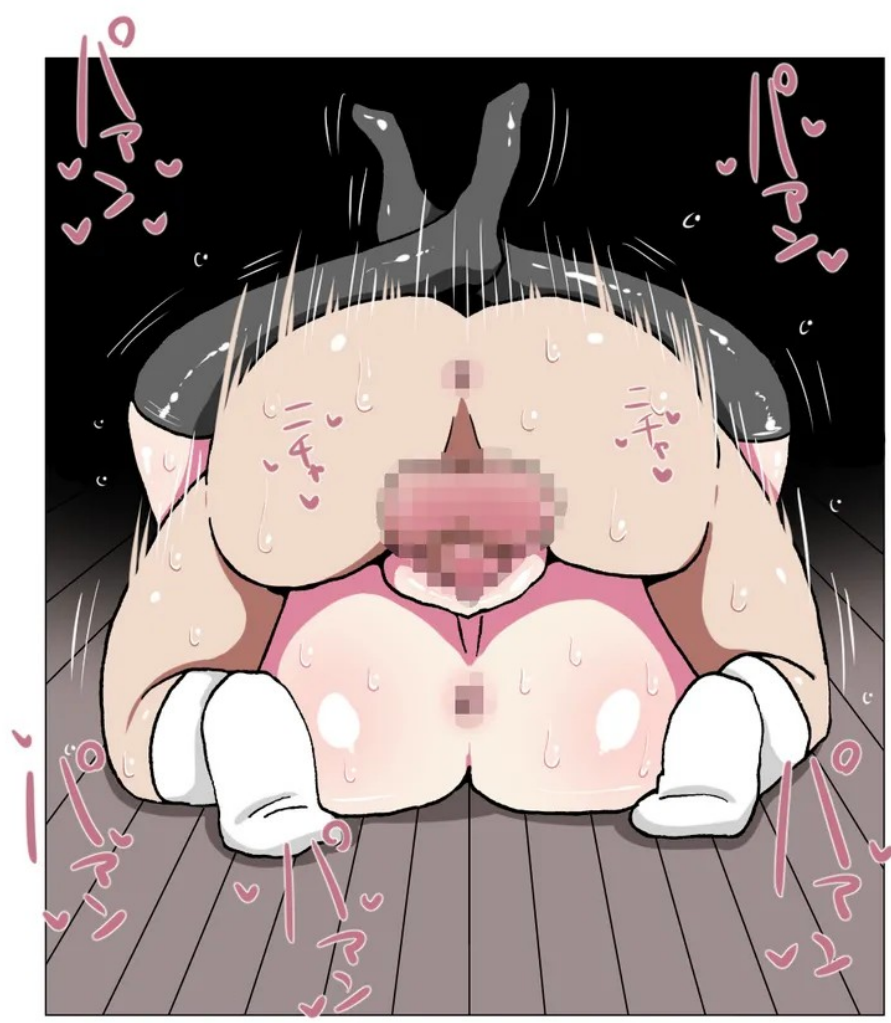


「ああ、そうか。お隣に越してきたんだね？」
隣は空き部屋だったことを思い出した。
「そうですね♡」
また女の子の胸が揺れる。
僕の身長の子の半分くらいの子が、
ちようど僕のちんちんのあたりで、
たぶと胸を揺らしている。
僕はちんちんが硬くなっている。
（あっ……まずい、勃起がばれてしまう）



(ま、まずい、このままじゃ……)
僕はしゃがみこんで、2人の目線に
合わせるフリをして勃起を隠そうとした。
(あ……♡)
すると2人の爆乳が目の前ってきて、
さらに我慢汁がどくどくと出てきた。
「あ、あの、パパとママは？」
注意をそらすように質問をする。
「ママはおでかけ♡
パパは今つかれてねちゃってるの♡」
「そ、そうなんだ」
僕の中に邪な心が生まれる感じがした。
「じゃ、じゃあまた今度、挨拶にいくよ……」

「お昼のあの場に妻がいなくてよかったです。完全に勃起して小さな子のおっぱいで見られたら終わるところだった。買物から帰ってきた妻を半ば強引に押し倒して、さっきのムラムラを解消しようとした。」
「ど、どうしたのあなた♡あっ♡あっ♡」
「ごめん、急にしたくなつて。好きだよっ。好きだ」
「あっ♡すっ♡今日♡の♡」
「こんな硬いの♡はじめて♡」



妻のママコにちんを激しく出し入れしながら、
妻の言葉に後ろめたさを感じた。
この硬さは妻の好きでしようがない人間だった。
僕は実は巨乳が好きで貧乳だ。
しかし妻はものすごくいい乳だ。
そんなのと妻が好きなのは関係ないと思っていた。
実際そうだ。妻が好きなのは関係ないと思っていた。
でも、今しているこのセックスは、
明らかに妻を思いながらする今までのものとは、
気持ちの入りが全然ちがっていた。
「出すよ、もう出る」





ビュ…ビュビュ…ビュ…♡
思い切り腰をぐりぐりと妻に押し付けて、
さっきの二人のせいで
こみあがっていた精子を妻の中に注いだ。
どくっ…どくっ…
とねばっこのいのが出てる感じがした。
「あっ♡あっ♡出てるっ♡すっ♡」
「こんなたくさん…♡」
一回の射精で妻の膣内は満たされたようだった。
結合部から精液がドロリと溢れ出す。
「ま…まだしたい」

全然気分がおさまらない。僕はまた腰をふりだした。
「あ♡あ♡だめ♡もっ♡イっただから♡」
「ごめんね、もう少しだけ…もう少しだけ…」
パンパンと肉がぶつかり、
ニチャニチャと精液がかきまぜられる音。
「好きだよ、好きだよ」
と言いなから、僕はさっきの爆乳を思い出しながら、
妻のマ◯コでち◯ちんをこすっている。
「あ♡あ♡私も♡」
妻がとてもうれしそうな顔をしながら、
僕を受け入れている。僕は最低だ…。
「また出る…」





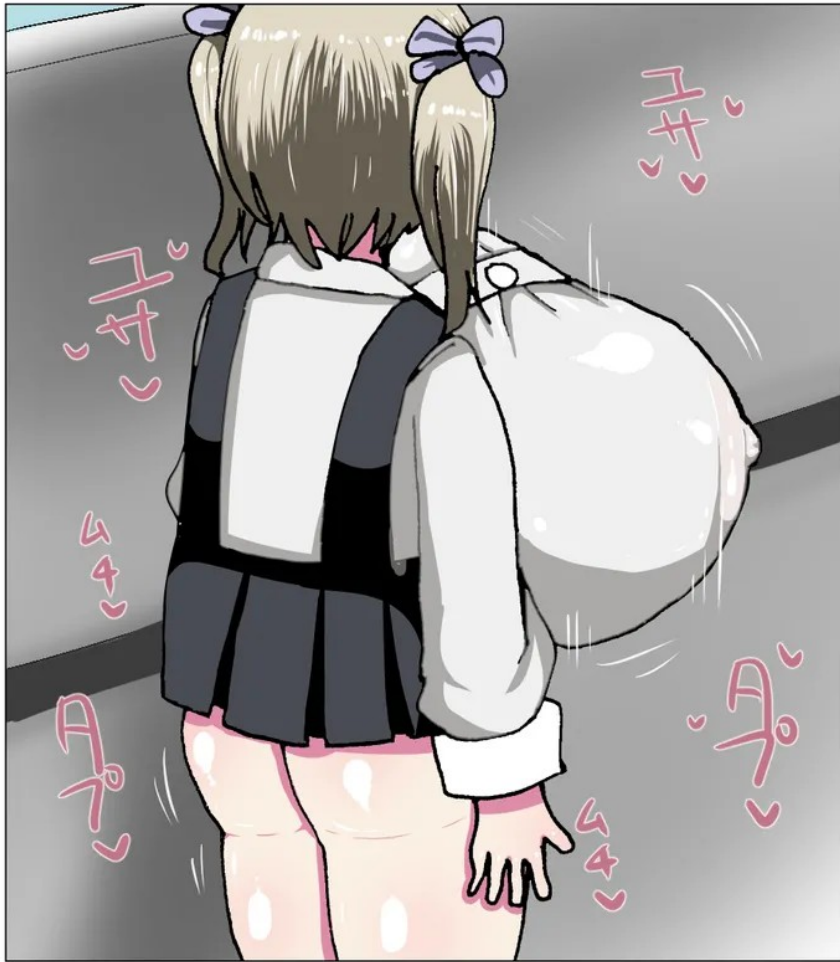
「あああ……出てる♡出てる♡」
と精子を排泄する。
二発目が出る。
ブルブルブルブル……♡
妻がビクビクと痙攣している。
最後の精子まで出し切ろうと
妻を強く抱きしめながら、
妻の壁のようになく胸が目に
欲がうすれていく。
欲がうすれていく。



次の日……。
「いってらっしゃい」
妻がいつも通り見送ってくれる。
でも、いつもより僕を見る顔がうっとりしている。
なんだかんだでセックスの回数は減っていたからか、
久しぶりにできてうれしかったようだ。
昨日のセックスで僕のオスを感じて、
妻はメスになっていた。
でも、僕は罪悪感を引きずったままだった。
ただ、あの爆乳をオカズに妻でオナーンただけだった……。
「いってきます……」

気分が乗らず、会社を早退した。
帰宅する途中、目の前を女の子が
歩いているのを見つけた。
後ろからでもハッキリとわかる。
横にはみ出した爆乳……あの子だ。
僕は音を殺して近づき、
後ろから女の子の胸元をのぞいた。
なんて大きさだ……。お尻の方もすごい……。
パンツはいてないのか……。?
歩きたびに全身の肉が、ぶるぶるたぶたぶと揺れている。
目の前を歩くいやらしい巨大な肉の塊に、
僕の下半身はあっさり反応した。
(揉みたい……)





昨日も思ったが、
女の子はブラジャーをつけていないようで、
シャツの下の乳首のピンク色から突起まで
はつきりと浮き出ている。
こんな格好して、男を誘っているのか？
こんなの他の男に見られないわけがない。
下半身がムカムカしてきた。
こんなおっぱい見せつけられて、
手を出せないなんて。。。
触れることができないなんて。。。
このおっぱいが許せない。。。
そのとき、女の子が振り向いた。

「あ、おとなりさんだ〜♡」
僕はあせりながらも、すぐにおっぱいから目をそむけて、
とぼけたフリをして今気づいたように見せかけた。
「あっ、えっと、あ…アヤちゃん？だっけ」
「こんにちは〜♡」
「こんにちは、今帰りかな…?」
「うん♡」(たぶんたぶん)
「ニコニコとおっぱいを揺らす。」
その一瞬でパンツは我慢汁でびちょびちょになった。
またムカムカしてきた。



僕は、このときすでに、
可能な限りこのおっぱいを目に焼き付けて、
今夜も妻のママコでオナニーをすると決め始めていた…。
今朝の罪悪感は一瞬で飛んでいた…。
このおっぱいを目の前にした途端、
まるでそうすることが当然のように…。
今夜のオナニーのための精液を
二つの金玉はすぐさま作り始めていた。
早く妻でオナニーがしたい。



くそ・・・イライラする、この胸を揉みたい、触りたい・・・
これだけでかけりゃパイズリもできるよな・・・。
エロマンガの中だけの話だと思ってたけど、
今目の前にそれができる肉がある。
でも、手が出せない・・・。
こんなおっぱいの中で精子出したら最高だろうな・・・。
くそ！くそ！
揉みたい揉みたい揉みたい
揉みたい揉みたい揉みたい！！



「おじさんごうしたの〜♡」
「え?」

ハッと我に返った。
アヤちゃんが僕の勃起を完全に見ている。
完全にバれている。

「あ…こ、これは、あの、その」
僕はなんとかごまかそうと必死で頭を働かせた。
しかしパニックになって言葉も考えも浮かばない。

「ふっん…♡」

アヤちゃんはおっぱいをぎゅうぎゅう変形させながら、
いやらしいメスの目をして僕を見てきた。

そして、そのまま視線を僕のチ「コ」に向けた。

先走り汁が染み出してズボンを濡らしている。

もう言い逃れはできない。血の気が引いていく。



「おじちゃんもっ…♡アヤのおっぱいであそびたいのっ♡」

「ちゅ」



アヤちゃんがおっぱいをぎゅむぎゅむ寄せながら、
上目遣いで僕を見てくる。
「男の人はみんなねっ♡アヤのおっぱいで
あそびたいっていうよっ♡」
遊ぶ？遊ぶってどうやってっ？
僕が聞く前にアヤちゃんが答える。
「ちっちんをおっぱいで抱きかかっ♡
こすってあげるとっ♡みんなビクビクっ♡ってしてっ♡
ちっちんからピュピュっ♡って白いの出ちゃうんだよっ♡
息があがる。心臓がバクバクする。
アヤちゃんから僕を誘っている…。」





「あ、あそびたい・・・」



「えっっ♡」
アヤちゃんが聞く。
頭が真っ白になっていく……。

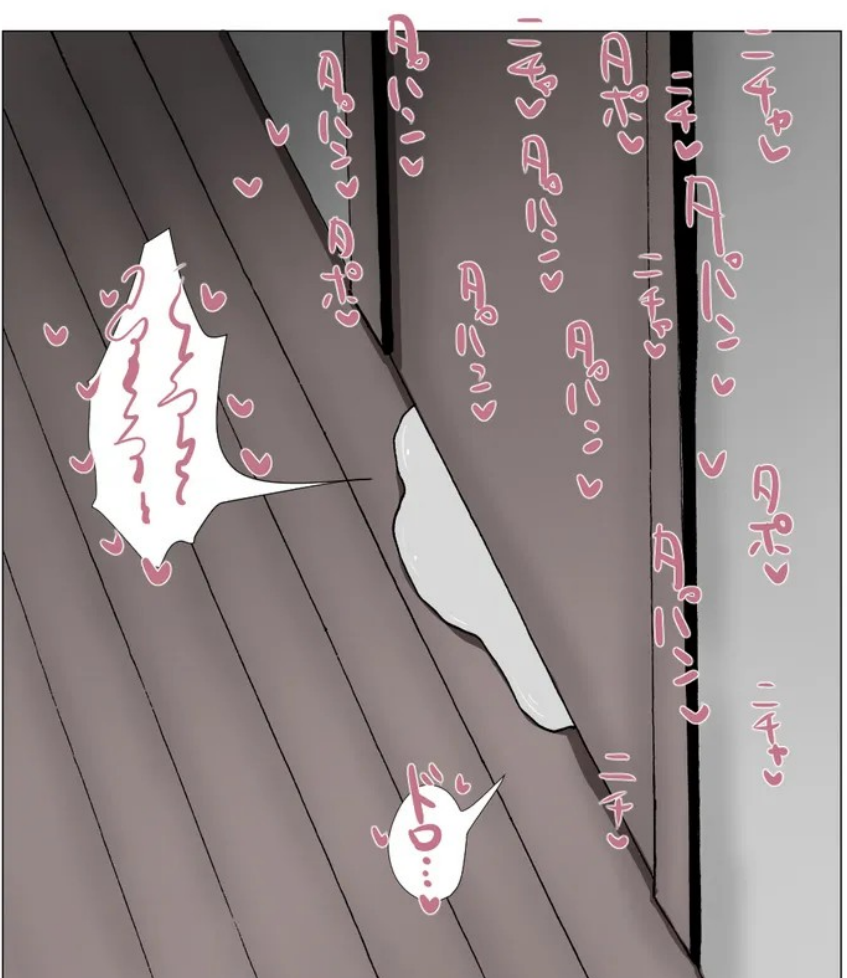
「あそびたい……！僕もアヤちゃんのおっぱいであそびたい……！」
僕はもうアヤちゃんのおっぱいしか見ていなかった。
思わず自分で手コを触り始めている。
はやくしたいはやくしたい。
はやくアヤちゃんのおっぱいでしたい。
「いいよ……じゃあアヤの家……♡」
「うん……！……♡……♡……♡……♡……♡」
ハアハアと息を荒げながら聞く。
「いいよ……♡……♡……♡」
アヤのおっぱいでたくさんあそぼうね♡♡
「あ……♡あ……♡」
精液が上がってくる。今からアヤちゃんのおっぱいで遊べる……。
夢みたいだ……。こんな爆乳を……。



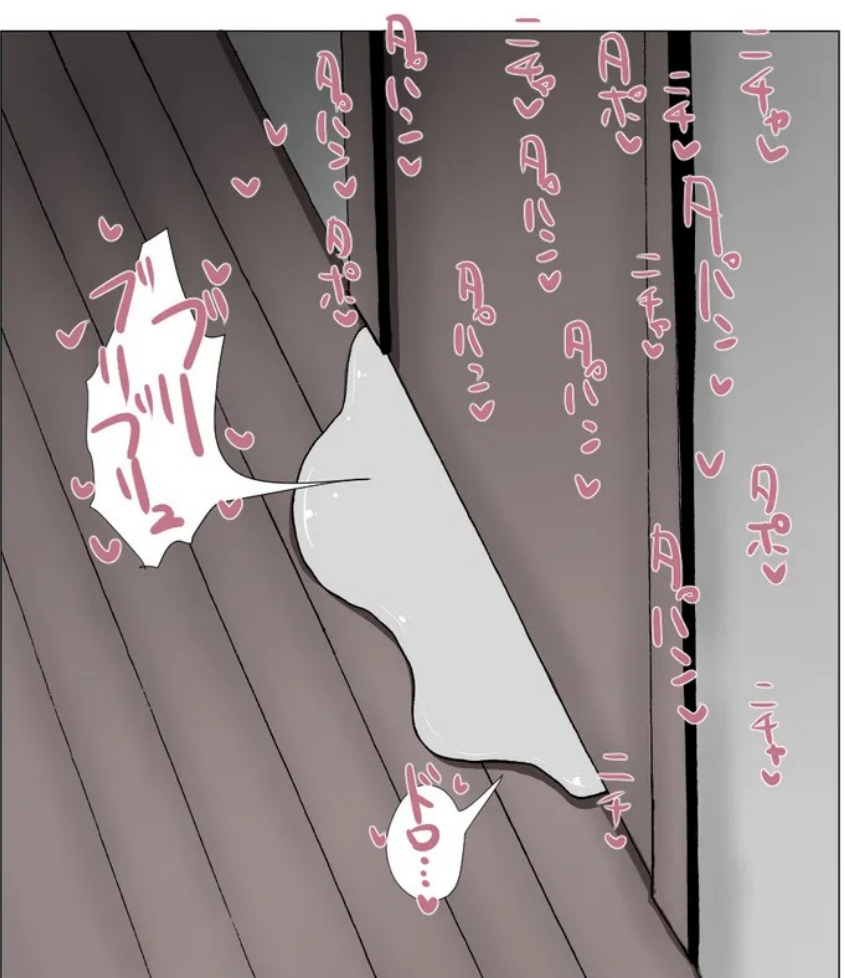


そのまま僕はアヤちゃんの部屋についていった……。
僕はこのとき、もうもどってこれないところこ
足を踏み入れていた……。

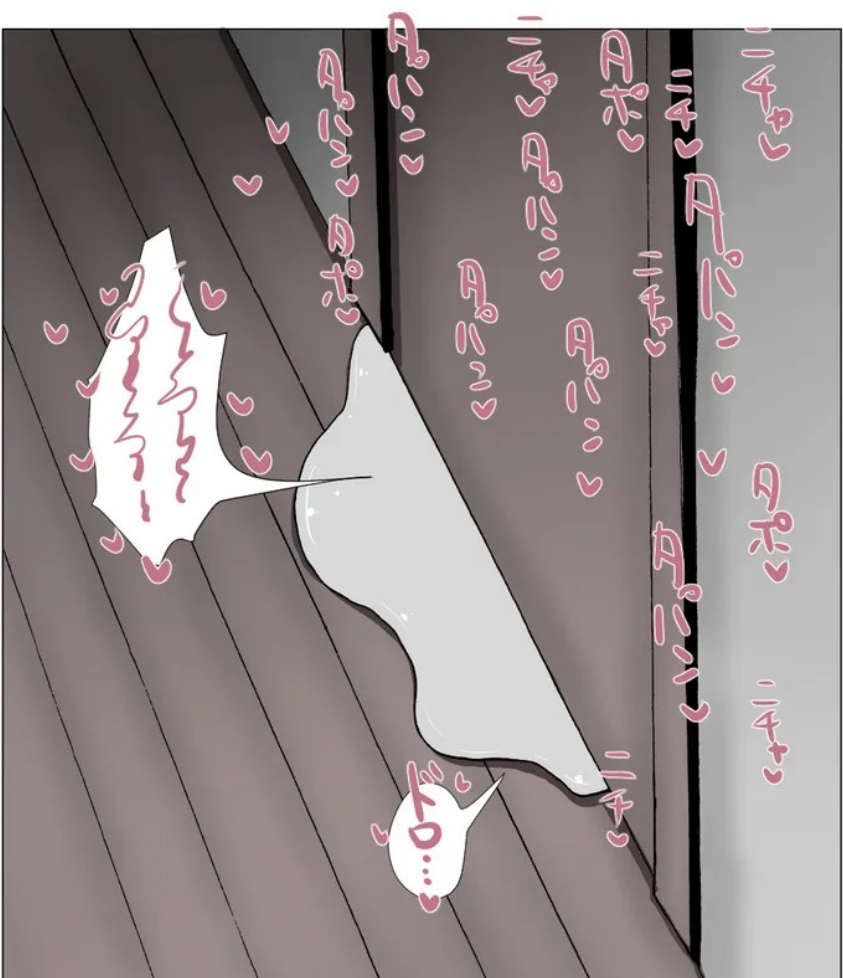
僕の部屋の隣の扉をあける。心臓がやばい。
どくどくと我慢汁を押しつけて精液がもう出始めている。
「じっただよ〜♡」
「おじゃまします……」
アヤちゃんの小さな手に引かれて中に入る。
すると、あるドアの下の間隙から
白い液体が漏れ出ているのを見つけた。
そのドアの向こうから、何か妙な音が聞こえる……。
パンパンと肉が叩き付けられるような音、
ビシャビシャと水が跳ねるような音、
そして……、男の喘ぎ声。



ブリブリブリブリブリブリブリブリ♡♡♡
「つるつる」
悲鳴は途切れることなく続いている。
「パパ…好き…♡好き…♡」
サヤちゃんのか細い声が聞こえてくる。とても甘い声。
漏れる液体は、まさに今この瞬間、
どんどん量を増しているようだった。
その量にぞっとした…。
いったいどれだけの精液が出ているんだろう。
どれだけの精液を搾られているんだろう。



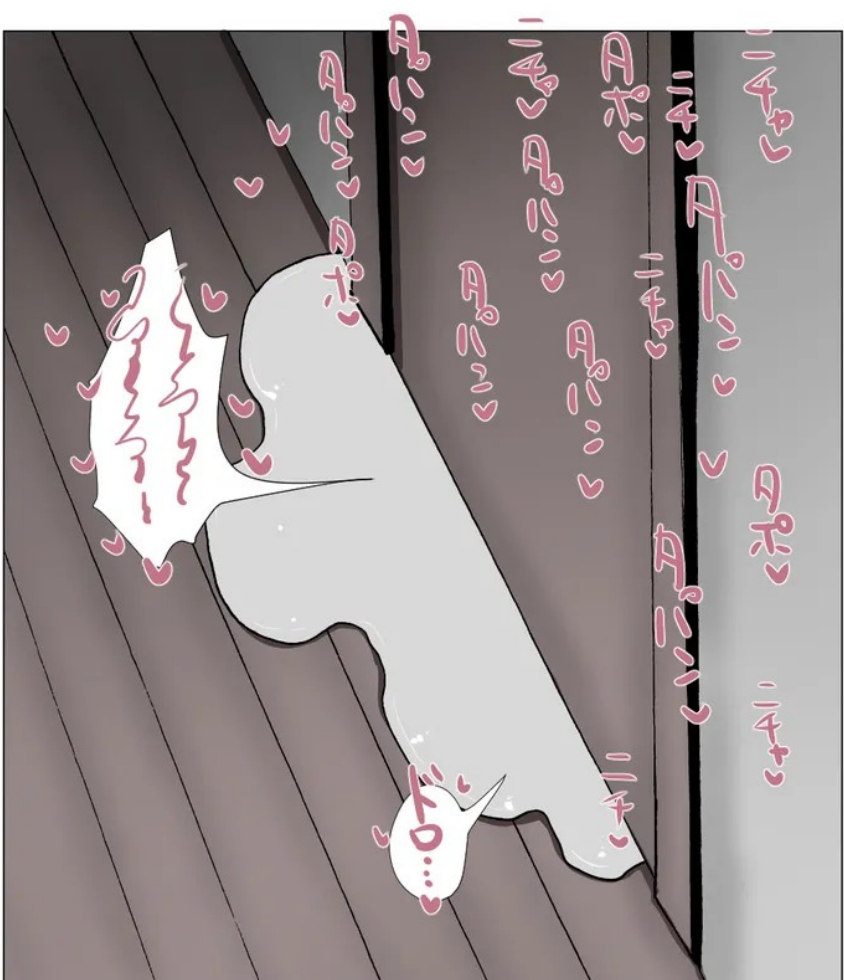
「や……や……や……」
パパのかろうじて絞り出すような声が聞こえる。
しかし、タパンタパンという音は
いっこうにやまない。
ニチャニチャと粘っこい液体が糸を引く音が
途切れなく続いている。

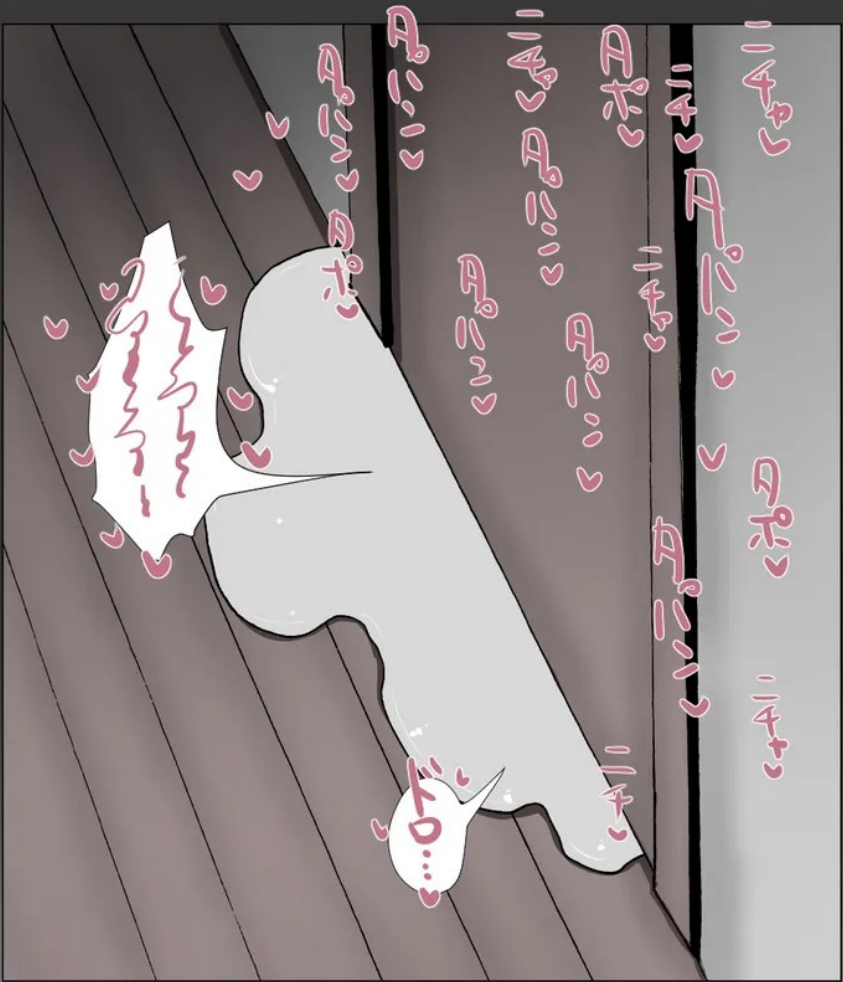


ブリブリユブリユボブリユ♡♡
まるで排泄するような音とともに、
床の精液がさらに増えていく。
どんどんどんどんどんどん増えていく。
「サヤったらズルいの♡♡
いっつもパパをひとりじめするんだよ♡♡」
僕はこの光景に足がすくんでしまった。
とてもまずいところに
来てしまったのではないだろうか……。
しかし恐怖の中で僕は勃起している。
扉の向こうで父親を犯し、おびただしい量の精液を
搾りだしているサヤちゃんを想像して。
ピュ…ピュ…♡と少し射精してしまう。



「でもいいもん♡
今日はおじさんが
おもちゃになってくれるんだもんね♡
そう言っアヤちゃんが僕の腕に
おっぱいを押し付ける。
お…おもちゃ…
そして理解した。





僕がアヤちゃんと遊ぶんじゃないかって、
僕でアヤちゃんが遊ぶのだ。

部屋に入った瞬間、すぐに僕は服を脱がされた。
もちろんバキバキに勃起している。

「わっ♡すっ♡い♡♡」

おじさんのけっこうおっきいね♡♡」

アヤちゃんの部屋と、アヤちゃん自身の甘い匂いが
さらにチコを硬くさせる。

アヤちゃんは服を脱ぎ、僕の手コにおっぱいをあてた。

(あ♡♡♡あ♡♡♡)

まだはさんでもないのに、僕は今にも射精しそうだった。
これは現実か？





バツとさらけ出したアヤちゃんのおっぱいが、
僕の手■に触れている...。
すぐ目の前にある...。
アヤちゃんは自分の膝に僕の腰をのせて、
完全にパイズリの体勢に入った。
ドクン...♡ドクン...♡
と手■が心臓に合わせてはねる。
ふと、妻の顔が浮かんだ...。
そして、僕の人生はこれで終わりになるんだと思った。
でもいい。これで終わってもいい。頭がしびれはじめる。
「ア、アヤちゃん、これは内緒だよ？」
「うんナイシヨね♡いいよ♡♡」
アテになるかわからない返事。



「うあっ♡♡♡あ♡♡♡す♡♡♡」
僕はほとんど悲鳴のような声をあげた。
アヤちゃんのおっぱいの中は、
汗で又ル又ルしていて、それでいて、熱く、
ものすごくせまく、チ「この全身を
なめるようからみついてくる。」
「も...♡♡出ちゃう♡♡出ちゃう♡♡」
「え...♡♡も...♡♡まだパンパンしてないよ♡♡」
僕はこのシチュエーションだけで完全に射精に向かっていて、
こんな小さな子のものすごい爆乳に挟まれて、
それだけで射精するには十分だった。
「あ...♡♡出る...♡♡あ♡♡あ♡♡あ♡♡」



「あ♡♡だめ♡♡イっただばかりで♡♡」
敏感になったチンポに圧力がかかる。
精液が上がってくる。
また射精する。



ビュ〜〜〜! ビュルル! ビュー〜ビュー〜!♡♡♡
「また……♡♡♡あ……♡♡♡」
ビクビクと痙攣する。また出した……。
しかし、アヤちゃんの爆乳の中で精子は閉じ込められ、
谷間からは一滴も出て来れない。
「あはは♡もうでた♡二回目早いね♡
でも最初はみんなこんなものだよ♡
みんな百数えられないでイっちゃうんだよ♡」



そして、アヤちゃんはおっぱいを動かし始めた。
パンパンという音が部屋に響く。
さっきのあの部屋の前で聞いたあの音……。
「あ……♡♡だめ♡♡
アヤちゃん♡♡また♡♡で……♡♡」
「うんいよいよ♡♡おっつな♡♡は5♡♡1♡♡2♡♡3♡♡」



「まだまだい〜くよ〜♡」

またアヤちゃんのおっぱいが叩き付けられる。
ピタンピタン、ニチャ〜ニチャと、

僕の精液がアヤちゃんのおっぱいの中を泳ぐ音がする。
全身が痙攣する…。脳がジワジワと熱くなる…。

「まっ♡♡まっ♡♡アヤちゃん♡♡ほ♡♡僕♡♡まだ仕事♡♡」
かろうじて発した声で、とっさに嘘をついた。

このままされたら意識が飛びそうになる。
「え〜っ、おしこなの〜っ」

まだ全然遊べてないのに〜」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡まだっ♡♡♡♡♡♡」

もうほとんど息ができない。

「ん〜…♡♡じゃあ最後の一回ね〜♡♡」

全部出し切らなきゃだめだよ〜♡」



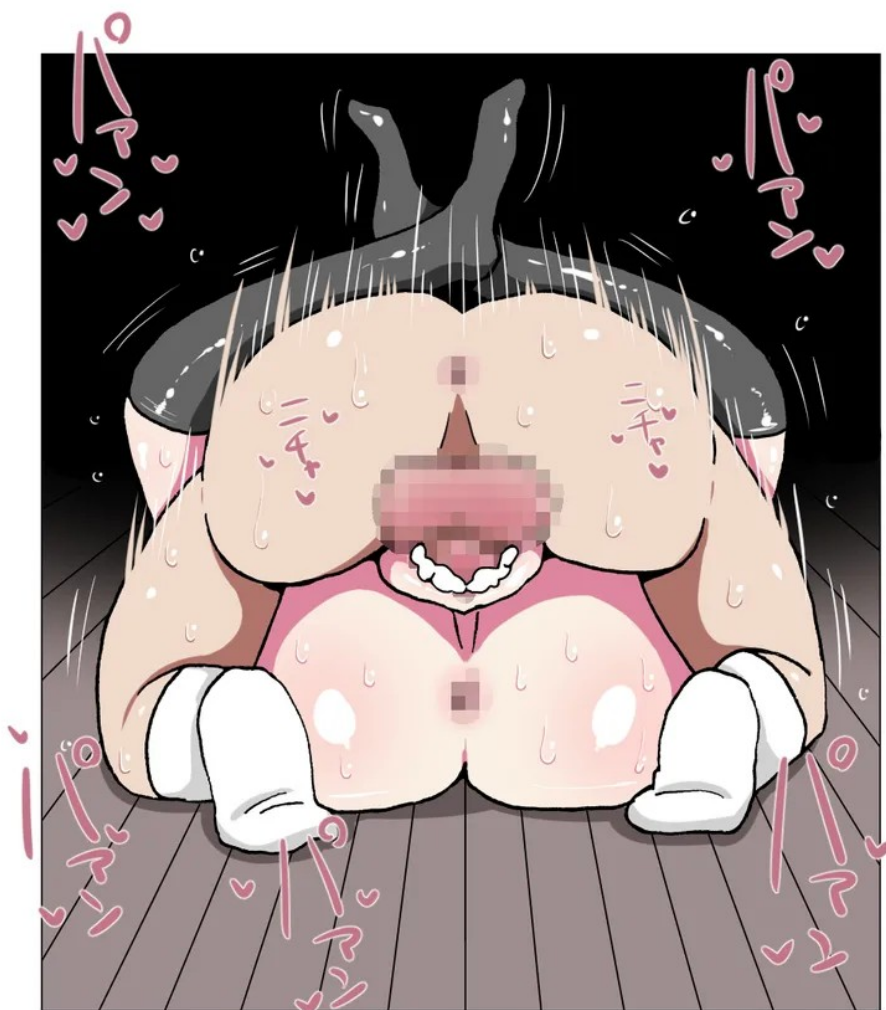
「ピュルルルルル！♡♡♡ジュルルル♡♡♡ブル♡♡♡」
悲鳴をあげて、僕は四回目の射精をした。
こんな一瞬で…こんな容易く…。
「じゃあおじさんまた今度ね♡♡♡」
「ねえねえ♡明日はこれね♡♡♡あさっては♡♡♡」
「あ…♡♡あ…♡♡あした…♡♡♡」
「明日くるの？♡♡うんまってるね♡♡約束だよ♡♡♡」
半分飛んだ意識で約束をしてしまった。
そして、僕はもう二度とアヤちゃんのおっぱいから
逃げられない身体に、
たったこの数分の遊びで変えられてしまった…。



その後、なんとか部屋にもどった僕は、
気絶するように何時間もベッドに倒れたままだった。
心配そうに声をかけてくれる妻に
返す言葉もなく、声も出せなかった……。



次の日の朝、意識が完全に戻ると同時に、僕はすぐに妻を半ばレイプするように犯した。夢の中でもアヤちゃんのおっぱいが、繰り返し流れてきて、起きたときにはチンチンはもうパンパンだった。「あ♡あ♡あなた♡だめ♡ちこくしちゃうわよ♡」「ごめん、あと一回、あと一回」アヤちゃんのおっぱいを思い浮かべながら腰をふる。昨日の快楽には到底及ばないが、なんとか射精までもっていきそうだった。「あっ、出る。出るよ」



妻を使ってもオナニーして自己嫌悪していたのに、
会社に行ってもずっとむらむらしっぱなしだった。
少し仕事に集中できたと思ったら、
すぐにアヤちゃんの顔が浮かんでくる。
ミスもしっぱなしで上司にも怒られた。
僕の頭は昨日した遊びの約束のことで
いっぱいだった。
まじっけい。目の前が真っ白になってぼやけていく。
何も手につかない。
このとき、僕にはまだ意識が
残っていたのかもしれない。
アヤちゃんとの約束をやぶるべきだろうか……。
次あんなことされたら、どうなるかわからなかった。





体調が悪いと思われたのか、今日は帰っていいと言われた。そして、家の前まで来たところに、アヤちゃんは立っていた……

「あゝ♡おそいよゝ♡まっただんだからゝ♡」

たぶたぶとおっぱいを揺らし、すねるようなそぶりを見せる。僕の手は、こは一瞬で交尾の体勢に入った。

そして、今までの葛藤も吹き飛んでしまった……

「こ……♡ごめんね……♡会社だったんだ、でも途中で抜けてきたから……♡」

「え……♡おし……♡いいの……♡」

「だめだけど……♡ぼく……♡」

「ふ……♡そんなにアヤとあそぶの楽しみだったんだゝ♡」

ぶるぶると誘ってくるおっぱいに
僕はもう我慢ができなかった。
「ア、アヤちゃんのおっぱいに抱きついていい……っ♡」
「うん、いいよ♡ほら♡♡」
アヤちゃんがおっぱいをグイと前に突き出す。
シャツがさらにパツパツとやぶけそうになっている。
僕はそこに顔を挟んだ。
アヤちゃんのおっぱいの隙間からは、精液のにおいがした。



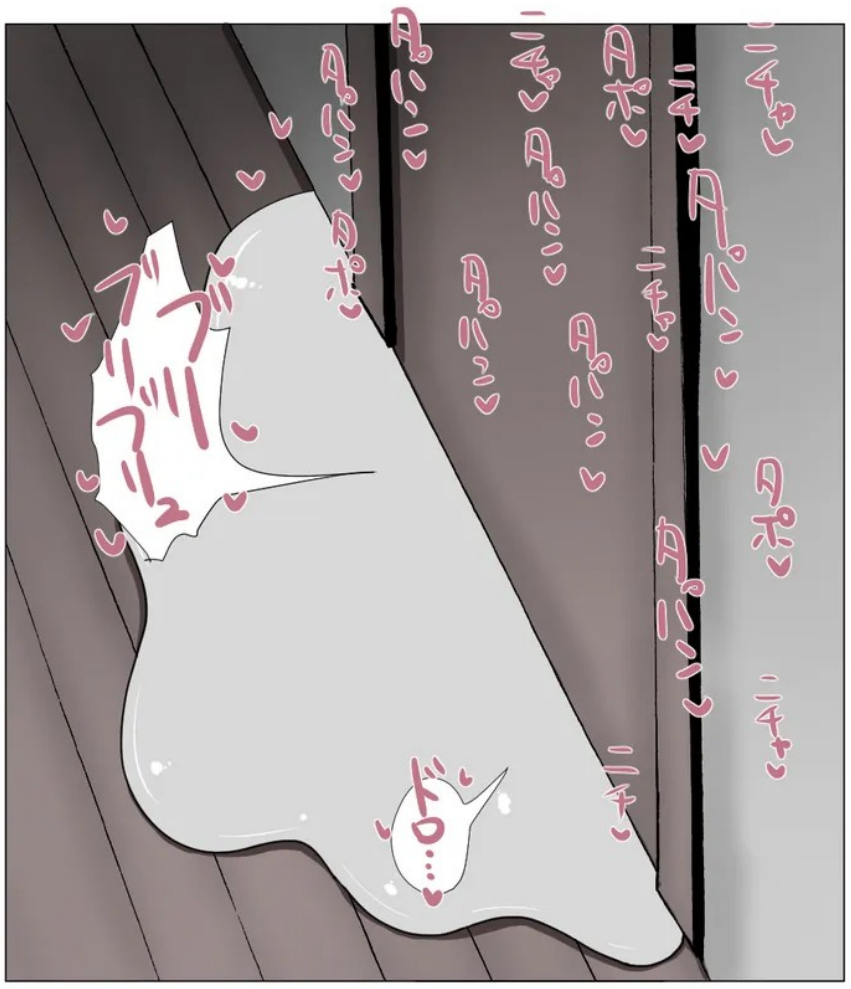


「今日も誰かと遊んでたの……?」
「うん、えっとね〜♡佐々木先生と〜♡
阿部先生と〜♡木下先生と〜♡
あとジユンくん〜♡アキラくん〜♡
カズくん〜♡」
「アヤちゃんが名前を羅列しだす。
そして、それがいつまでも終わらない。
「あと、三階のおにいさんと〜♡」
ゆうに三十人は超えている。
僕は嫉妬でおかしくなりそうので、途中で止めた。
「ほ、僕だけと遊ぶことはできないの……?」
馬鹿馬鹿しい質問をする。
「え〜♡わがままちゃんなの〜♡♡
アヤをひとりじめしたいんだ〜♡」



「アヤのこと好きなんだ〜?♡」
「…うん♡好き…♡好きになっちゃったよ…♡」
「でもごめんね〜♡アヤもみんなと遊びたいし〜♡
みんなもアヤと遊びたいって言うもん〜♡」
「わかりきっていた答え。」
「おもちゃは多い方がいいに決まってる…。」
「僕も他の男もみんな、
アヤちゃんのおもちゃのひとつにすぎない…。」
「は♡はやくあそびたい♡僕のちんちん、
アヤちゃんのおっぱいで
遊びたいよ〜♡」
「うんうん♡じゃあお部屋はいりまちょうね〜♡」

ブリブリブリブリユブリユ♡♡♡
精液はさらに増える。
ビチャビチャビチャと
水たまりを踏むような音が響く。
あっちの部屋はもはや
精液のプールになっているのだろう…。
父親の体液がすべて精液として
搾り出されている…。
「…ね♡ね♡あそぼっか…♡♡」
「…うん♡」
僕の手■コからよだれのように
我慢汁がだらだら垂れてくる。





「あ……♡♡♡あ……♡♡♡」
そしてパイズリが始まる。
今日は最初からおっぱいを叩き付けてきている。
あっという間に精液は上がってくる。
「も……♡♡♡でる……♡♡♡もう……♡♡♡」
「はや……♡♡♡い……♡♡♡まず一回田♡♡♡」
出しておきまちようね♡♡♡」
ピストンが加速する。
もうおっぱいの感触と射精のことしか考えられない。
出す。
アヤちゃんのおっぱいの中で。
おもちゃにされて無様に……。



「あ……♡♡♡あ……♡♡♡」
「はい一回♡♡♡きもちよかったですね♡♡♡」
「精子を漏らす。」
「アヤちゃんのおっぱいおむつの中で。」
「僕は精子を排泄するだけの赤ん坊になる。」



「ね〜ね〜♡♡♡これ飲んで〜♡♡♡♡♡」

「アヤちゃんは何かを渡してくる。」

「チ力チ力する眼でかろうじて、それがカプセルだとわかる。」

「な...なに...?これ...?」

「これを飲むと〜♡♡」

「ピュッピュが止まらなくなるんだよ〜♡♡」

「たくさんたくさん遊べるようになるの〜♡♡」

「あやしいドギツイ赤色。」

「完全にヤバイ薬に見える...」

「どっでもらったの...?」

「えっとね〜♡♡前に黒人さんと遊んだときに黒人さんが使ってたの〜♡♡」

「たくさんおっぱいしたら黒人さん返事しなくなっちゃったからもらってきちゃった〜♡♡」

「パパに飲ませたらすぐなくなったんだよ♡♡
ずっずっピュッピュできるの♡♡♡
ワンちゃんみたいになって♡♡♡
グルグル♡ワンワン♡って♡♡」
ドクン…ドクン…♡
僕は恐怖しながら、興奮している。
ああいう風になってしまおう…。
ただ精液をつくるだけの肉の塊になる…。
そして、快樂の中で獣のように言葉を失う…。
アヤちゃんの完璧なおもちゃになる…。
二人の父親のように…。





「ね〜♡ね〜♡これ飲んで♡
サヤばかりパパひとりじめ♡しずめる♡の♡
アヤのパパになって♡」
「ア...アヤちゃんのパパに...♡♡」
ぐらっ♡くる。
僕が...アヤちゃんのパパ(おもちゃ)に...。
答えは決まっている。
「なる...♡なる...♡アヤちゃんのパパになる♡」
「ありがとう♡じゃあパパ♡」
「これ飲んでアヤとたくさんたくさん遊んでね♡」
ゴク...ゴク...。
僕は薬を飲んでしまった。



「あ……♡♡♡♡♡あ……♡♡♡♡♡」
すぐにわかった。「この薬は危険だった。
僕の体中の血液がチ●コに流れていく。
金玉がギョルギョル稼働して
ものすごい勢いで精子をつくる。
脳が機能しなくなっていく。頭が軽くなる……」
「わっ♡♡♡♡♡」
ち●コおっぱいの中です♡♡♡♡♡
ガチガチ♡♡♡♡♡」
「うあ……♡♡♡♡♡」
あう……♡♡♡♡♡あう……♡♡♡♡♡
「うまく喋れない。声が出せない。」
「はい♡♡♡♡♡ワンちゃんパパ♡♡♡♡♡」
「アヤといっしょに遊びまちょうね♡♡♡♡♡」



「あ...」
あ...あ...あ...
あ...あ...あ...
あ...あ...あ...
あ...あ...あ...

「ブビリブビブビブニユブニブニ……♡♡♡♡
「わ~~~~♡♡♡すい~~~~♡……♡♡♡♡
下痢のような音を出しながら、精子を吐き出す。
意識が遠のいていく……。
死んじゃう……。
死んでしまう……。





「うっん…♡♡♡
でもこのへんにしておこうかな♡♡♡
パパみたいになっちゃうと困るもん♡♡♡」
「アヤちゃんがおっぱいを止める。
(やめないで…♡♡♡もっとして…♡♡♡)
しかし言葉が出ない。
「おじさんパパのこと大事に大事にするね♡♡♡
また次つづきしようね?♡♡♡
あ、寝ちゃうの?♡♡♡
トロ〜ンって白目むいてかわいいね♡♡♡
よだれたくさん出てるよ♡♡♡
も♡♡♡しょうがないでちゅね♡♡♡
じゃあ、おやすみなちゃ♡♡♡」



♡♡♡...♡♡♡♡♡

[.....]

どうやって戻ってきたのか。
わからないが、気づくとベッドの上にいた。
僕は丸二日寝ていたようだった。
まるで全部夢だったようだ。。。
しかし、手足がまともに動かず、
全身はやせこけていた。。。
下半身のたるさ。。。
もちろん夢ではない。。。。

妻は僕につきっきりで
看病してくれていたようだった。
しかし、目が覚めてすぐに来たのは、
異様な性欲だった。
あの薬がまだ効いているのか。
もうだめだ、理性がきかない。
今すぐ精子を出したい。
射精したい。隣に向かう。
すぐに部屋をとびだして、隣に向かう。
でも鍵がかかっている。
アヤちゃんは留守だ。



「あ♡♡♡あ♡♡♡あなた♡♡♡だめ♡♡♡
そんな♡♡♡はげしく♡♡♡」
僕はムラムラを妻にぶつけることにした。
ただただ腰を打ち付ける。
妻はもうただのおっほだった。
アヤちゃんのおっぱいを想像しながら
チコをこするのための…
「う…出る…」



まだまだ終わらない。
こんなの快楽じゃない。
またたく間に持たない穴で
まったく射精に持ち込むのは苦勞する。
僕はオナホの奥限界まで
チコを突入れてピストンする。
「あ……♡♡♡あなた……♡♡♡」
だめ……♡♡♡死ぬ……♡♡♡」
オナホがしゃべる。こゝろさい。
大人しくチコを入れられてろ。



そのまま三時間オナホでオナニーしたが、
ムラムラはいつころにおさまらない。
早くかえってきて。
アヤちゃん、アヤちゃん。
もう限界だ。
ピュッピュッしたい。



オナホに出しては隣にいつても繰り返しているよ、
とうとうアヤちゃんが……と思ったら、
玄関の前にいたのはサヤちゃんだった。
「サ……サヤちゃん……？」
「あ……おとなりさん……」
サヤちゃんのか細い声。
僕は勃起している。
サヤちゃんのおっぱい。
あのときの挨拶以来の……。



サヤちゃんのおっぱいを凝視する。
「あ……あの……」
サヤちゃんが恥ずかしそうに身体をもじもじさせる。
おっぱいがぎゅうぎゅうと変形する。
したい。
サヤちゃんのおっぱいでしたい。
「おじさん……アヤとあそんでるんですよね……」
サヤちゃんが小さくつぶやく。





「う……うん……♡
僕、アヤちゃんのパパになったんだ……♡」
「あ……あの……」
アヤのパパってことは……サヤのパパにもなってくれるの……？」
サヤちゃんが言う。
サ……サヤちゃんのパパに……？僕が？
「あのね……パパのこと好き好きすぎて
パパ動かなくなっちゃったの……」
今病院いっちゃったんだ……」
パパが治るまで、私のパパいないの……」
ドクン、ドクン。
心臓が痛いほど鳴っている。



「だから……」
「うん……なる♡なる♡」
「サヤちゃんのパパにもなる♡
僕♡パパになる……♡」
「ほんっっ。」
「サヤちゃんがうれしそうにする。」
「サヤちゃんのパパだよ……♡」
「もう射精ギリギリだ。」
「はやくサヤちゃんと遊びたい。」
「じゃあパパ……♡きて……♡」
「サヤといっしょになろ……♡」
「サヤちゃんの部屋に引きずりこまれる……。」



「パパ…パパ…♡」
サヤちゃんのピストンは最初から容赦なかった。
アヤちゃんの愛でるような撫でるような
パイズリとは全然ちがう。
これは暴力だ。
おっぱいでチ■コをリンチされている。
こんなパイズリを…サヤちゃんのパパは…
そして今…僕がサヤちゃんのパパなのだ…。



「あああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「パパ…好き…パパ…」
「サヤちゃんはピストンをゆるめない。
おっぱいを腰にいたいぐらいに
ぶつけてくる。」



「出して出して♡♡♡♡
出してぱんぱん♡♡♡」
射精中のチコにおっぱいをたたきつけ続ける。
容赦ない。
止めてくれない。
頭がいたい。
チコが悲鳴をあげる。
死ぬ。
殺される。



ブビュ~~~~♡♡♡
ブリブリュブリュブリュ!!!♡♡♡♡
一瞬で僕の体液はほとんど搾られた。
しかし……とまらない。
また続く。まだまだ続く。
「ブビュ~~~~」
言葉を発せられない。
ただただ搾精される。
乳牛のように搾られる。
意識が飛びそうなところに、
快樂が追い打ちをかける。

「ただいま〜…って、あーサヤする〜い！アヤのパパなのに！」
アヤちゃんの声が聞こえる。
アヤちゃんが帰ってきたようだ。
「だって…サヤのパパにもなるって
いってくれたもん♡」
「え〜っ、そのなの〜っ、ずるいよ〜。
パパのこと壊しちゃったくせに〜」
壊される。
僕も壊される。
サヤちゃんに。娘に。
身体中の液体を全部搾られて。
壊される。死ぬ…。



「じゃあ二人でしよ……」
アヤちゃんとサヤちゃんのおっぱいで僕のちんこが埋まる。
「あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡」
「も……しようがないな」
パパ♡おやすりの時間だよ♡
アヤのぶんのピュッピュもたくさんつくってくれるよね♡
アヤちゃんがクスリを口にねじこんでくる。
一つ。二つ。三つ。四つ。五つ……
一体いくつ飲まれたんだろう。
この前以上の快楽がくる……
「あ……♡♡♡♡♡」
ドクン。ドクン。ドクン。





パイズリが始まる。
二人がかりのおっぱいとチコ^コの交尾。
クスリが効いてくる。
脳に電気が走る。
おっぱい以外何も見えない。
チコ^コ以外の感覚がない。
手足が動かない……。
「ね〜気持ちいいっ?♡♡パパ♡♡♡」
「パパ: たくさん出してね:♡♡♡」
二人がかりのピストン。
二人がかりで……壊される。

「ほらほら♡♡もっもっ♡♡」
「もっもっもっもっもっもっ♡♡♡♡♡♡」
悲鳴も出せない。
チンチンの感覚だけが全て。
また出る。
出続ける。





もう声は出せない。
全身は痙攣し続けている。
電気ショックを受けているように
ガクガクする。
また出る。
そして僕は死ぬ……。

まだまだ。ピストンは続く。
僕は意識を失った。
暗い暗い闇に落ちていく……。
もうこのおっぱいを感じる事が出来ずに……。
ここで死ぬ……。









どれだけの時間がたったか……。目覚めたとき、僕の目の前は真っ暗だった。柔らかい闇。

それはサヤちゃんのおっぱいだった。そして、チ「こはアヤちゃんのおっぱい。」

「あ……起きたみたい♡♡♡」

「パパ……今日もたくさんしようね♡♡♡」

意識の無い間も僕は二人のおもちゃとして精子を排泄し続けたようだった。





今は何月の何日か…。
そんなことどうでもいい…。
僕はただ射精するだけの存在。
他に必要なものはなにもないんだ…。
「あ♡♡♡また出る?♡♡♡
いいよ♡♡♡出して♡♡♡♡♡♡
はい、ユックユク♡♡♡♡♡♡」

また僕は意識を失う……。
そして射精の快楽でまた眼を覚ます。
気を失う。
その繰り返し……。
パイズリされ続ける……。
妻……。
会社……。

一瞬、そんな単語が浮かんだ。
しかしすぐに消えていった。
僕は犬。赤ちゃん。パパ。そしておもちゃ……。
ただ精子を出し続けていればいいんだ……。



また、闇に落ちていく……。